



「活動」の一環で制作する販売用オリジナルマット。靴下の廃材を利用しており、吸水性が抜群。



思わず利用者のおしゃべりに花が咲くあまみず

たいな話ですね。私はこの話をお墓まで持って行きたい(笑)。

**飯島**▼利用者さん同士でなければ分らないところでしょうか。

**北澤**▼色んな方の暮らしがあるから、人を人として受け入れてもらえる背景があるのだと思っています。私たち職員がやらなきゃいけないことは、人それぞれを評価して、「この人にはこういう良い所がある」ってみなさんで確認し合うことで、それぞれの個性や人脈の組み合わせや相乗効果を考えます。そうすると利用者さん同士の暮らしの幅が広がり、仲間が広がりやす。本当に、暮らしを支えているのは利用者のみなさんであって、私たちではないって思いますね。

## 支え合いの自立

**北澤**▼元々ここは、長野県が運営する知的障がい者総合援護施設『西駒郷』の補充施設、高齢者の受け入れ先として設置されました。

例えば、現在70歳代の方は『西駒郷』が出来た昭和43年当時は30歳代で、それまでは何をしていたかという、ずっと在宅で家族内就労、お父さんやお母さんと一緒に耕作だとか草刈だとかをシャカリキにやっていたんです。

それが施設に入ると、集団で500人もいて、訓練以外は比較的楽な暮らし、ご飯は黙っていて

も出てくるし、衣装も寝床もちゃんと用意されています。そういう施設の環境にどっぷり浸かって、やがて悠生寮にやって来ます。その頃には、体力は年齢相応に落ちて、相応の介護も必要になります。しかし障害から来る支援の困難さとか、障害が更に重度化してくるパターンは少ないんですね。それはやはり青年期に、在宅でキチッと体を動かしながら社会で暮らししていたのが大きいと思います。

そういうみなさんに対して、日頃の「活動」(穂高悠生寮の利用者による奉仕作業や物品制作)というのを提供して5年になります。最初は手探りでしたが、基本的には「ここ(悠生寮)から外へ出よう」ということで公園の掃除とか、ボランティア的なことから始めました。やがて寮内の作業場で薪割りやマット作りを始めました。すると、やっぱり思い出してくるんですよ、昔の感覚を。

ある利用者さんは、薪割りをするようになってから昔のことを思い出して、運搬は職員の指示がなくともテキパキこなすようになりました。ある時、薪に予約が入って、明日が出荷という日の朝、その利用者さんがブラシを持って、積み上げた薪の埃やクモの巣を丁寧に払って、一把一把トラックに積んでいきました。それを見ていた他の利用者も、一緒に手伝い始めたんです。

そういうのを私は「(社会生活の感覚が)蘇った」って表現するけれども、かつこい職員たちは「復権だ」って言うんですよ(笑)。やはり昔取ったものが蘇るっていうチャンスはいくらでもあって、それを私たちがどうやって提供するか。利用者さんの暮らしは利用者さんに支えられて、私たちは「活動」の呼び水をしてあげる。決して新しい試みとかではなくて、昔やったことを少し思い出して、利用者さんが喜んで継続していけば、それが生き甲斐になると思いました。

**飯島**▼その人に合った仕事、作業の内容ってというのがその人の存在場所っていうことですよ。自分の位置を確認できる場所って良いですよ。

**北澤**▼今の「障害者自立支援法」では、人の介助を極力無くして、働けて、一人で住まえる。この3パターンが「自立」だということになっていますが、私は、障がい者が一人で暮らせなくても、みんなが支え

てあげれば暮らせると思うんです。そういう意味では、このみなさんは、『立支法』という自立度は低いかもしれないけれど、志は完ぺきに自立、だと思っています。

**飯島**▼一人で何でもかんでも他の手を借りずにできるのが自立ではなくって、手を貸し合うこと、イコール自立。それぞれの自立。

**北澤**▼そうそうそう。互いに認め合うってことでしょ。そう思います。

**飯島**▼なるほど。そう捉えると、自立の意味の解釈自体が違ってきますよ。

## 社会福祉法人りんどう信濃会 穂高悠生寮

長野県立の知的障がい者総合援護施設『西駒郷』の保護者らが中心となって、比較的高齢な知的障がい者の居住施設として設置された県下6か所の悠生寮のうちの一つ。

穂高悠生寮の正面玄関



昭和58年に開設された。定員は男性25名、女性25名の計50名。

〒399-8305

長野県南安曇郡穂高町牧

電話 (0263) 8314728

FAX (0263) 8314727

URL <http://www.hotakayusei.jp/>